



TITLE:

大京都市實現

AUTHOR(S):

吉田, 敬市

---

CITATION:

吉田, 敬市. 大京都市實現. 地球 1931, 15(5): 362-372

ISSUE DATE:

1931-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183901>

RIGHT:

## 大京都市實現

吉田敬市

近時人口の都市集中益々濃厚となり、農民は農具を捨て漁民亦漁具を放棄して都市へと集中する結果、都市自體は既に人口飽和狀態に達し收容力を減じつつある。此處に於て勢、都市の周縁部に膨張し接續町村への進出を餘儀なくせしめられた。而して此等接續町村の都市化と共に都市との交通は至便となり、清潔なる空氣と閑靜なる自然景、土地の安價等と相俟つて人口集中度を高め、或は住宅區域に或は工場地區に學校病院等の建設地に益々利用せられ、都市の人口増加率の二倍三倍或はそれ以上の急速なる増加發展を來しつつある。是れ世界的の共通現象にして大都市程此傾向が著しい。

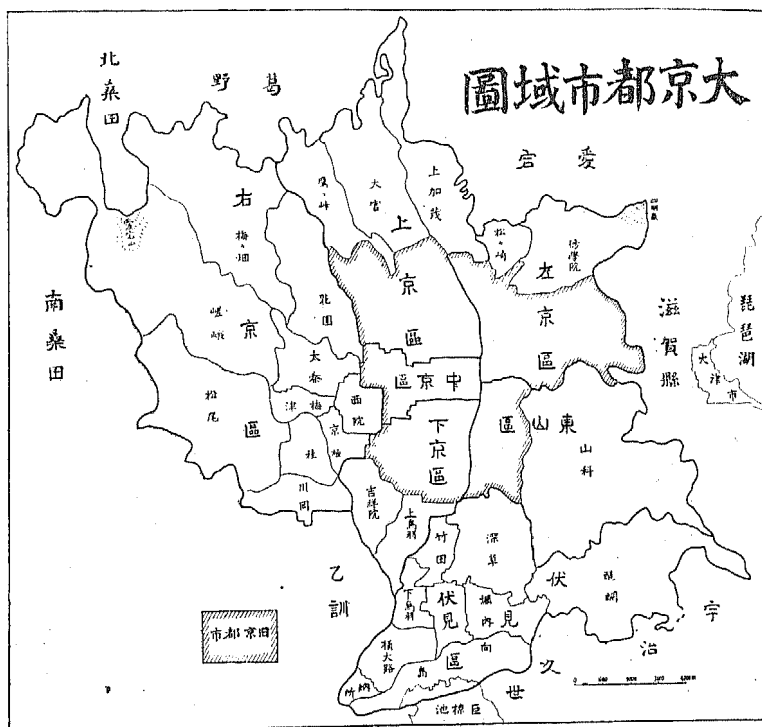
我京都市に於ても此傾向年々甚だしく周縁部は急速なる發展を來し、市村の境界を全く超越

して市街化しつつある。茲に於て、此等の接續町村を編入し、一都市の下に統合ある各種の文化施設の必要と、又我市の特徴たる遊覽都市の眞價を遺憾なく發揮せしむる爲めに、近郊に散在する幾多の名勝古址を包容する一大都市の出現を計畫し、昭和六年四月一日新に伏見市外二町廿四ヶ村を編入し、面積は日本第一位、人口九十五萬餘の大都市が生れたわけである。

## 編入後の京都市域

平安遷都當時の平安京は東は加茂川より西は桂川まで北は一條より南九條に至る一大都であつた。歴史の變遷に伴ひ都市の形態より境域にも亦影響し、時代により様々の形態をなしてゐたが結局昔の左京を中心としたもので右京は長く田圃濕地で終つた。近時の京都市の膨張は顧

圖域市都京大



みられなかつた昔の右京の地に及んで完全に平安時代の右京まで市街化しつゝあつた。今般の編入は其右京の地は勿論、北は丹波高原の一部分たる愛宕葛野の二郡の山地から南は紀伊郡全部を完全に編入し、東は滋賀縣境で比叡山から逢坂山を経て南に延び宇治郡の大半を入れ、西は丹波高原の東端山地まで及び、其廣袤實に東西約七・五軒、南北約六・三軒、面積二八八方軒餘、人口は約九十五萬で日本第三位といふ廣大なものとなつた編入された各町村の面積人口を表示すれば左の通りである。

| 市町村名 | 面積<br>方 | 人口     | 人口密度<br>方 |
|------|---------|--------|-----------|
| 伏見市  | 二・八八四   | 三一、五八三 | 一〇、九三六    |
| 修學院村 | 一〇・〇七一  | 八、四五九  | 八三九       |
| 松ヶ崎村 | 二・六〇六   | 一、二〇五  | 四六二       |
| 上賀茂村 | 九・二八五   | 五、七六七  | 六一一       |
| 大宮村  | 一・八七六   | 一、六八三  | 一四二       |
| 鸛ヶ峰村 | 七・四六五   | 一、二四八  | 一六七       |
| 太秦村  | 四・六七三   | 一、〇一八  | 二、三五八     |
| 西院村  | 二・六九九   | 一、二六一  | 四、六七五     |
| 京極村  | 二・二六七   | 三、一七七  | 一、四〇一     |
| 桂岡村  | 三・三〇〇   | 二、六八八  | 八一五       |
| 川岡村  | 四・〇八七   | 二、八五七  | 六九九       |
| 松尾村  | 一・七五三七  | 三、〇八五  | 一七六       |
| 梅津村  | 一・八八一   | 二、四五九  | 一、三〇七     |
| 嵯峨町  | 三・二七二   | 八、九六八  | 二、七四      |
| 花園村  | 一〇・三六五  | 一一、〇五五 | 一、〇六七     |
| 梅ヶ畑村 | 一九・七四二  | 一、三四   | 六八        |
| 向島村  | 六・七二四   | 三、二九二  | 五〇三       |
| 堀内村  | 四・〇二五   | 五、〇〇九  | 一、二四四     |
| 深草町  | 九・一七七   | 二六、六六五 | 二、九〇六     |
| 竹田村  | 二・四二一   | 四、六八九  | 一、九三七     |
| 吉祥院村 | 四・三九六   | 五、六〇三  | 一、二七五     |

| 市町村名 | 面積<br>方 | 人口      | 人口密度<br>方 |
|------|---------|---------|-----------|
| 上鳥羽村 | 四・一八    | 四、五三〇   | 一、一〇〇     |
| 下鳥羽村 | 二・三四四   | 一、五四四   | 六五九       |
| 横大路村 | 三・九九四   | 一、五七七   | 二九五       |
| 納所村  | 〇・九八七   | 一、三一    | 一、三二八     |
| 山科町  | 二・三四九   | 二〇、三九六  | 七一九       |
| 醍醐村  | 一・八二一   | 三、四七〇   | 一九一       |
| 合計   | 二三八・二一七 | 一八七、三五五 | 八二一       |
| 舊京都市 | 六〇・四二九  | 七六五、一四二 | 一二、六六二    |
| 新京都市 | 三八・六四六  | 九五二、三九七 | 三、三〇〇     |

かく面積は狭きは納所の〇・九八七方籽より大は嵯峨町の三二方籽餘に至るまで合計二二八方籽餘を編入し、舊市の四・七倍強の面積となつた。然し全面積の三分の二は山地で平地は僅かに三分の一に過ぎないといふ。此點は他の大都市と大いに異なる點であつて廣大なる山地まで市域に編入せねばならなかつた理由は奈邊にあるか興味ある問題である。

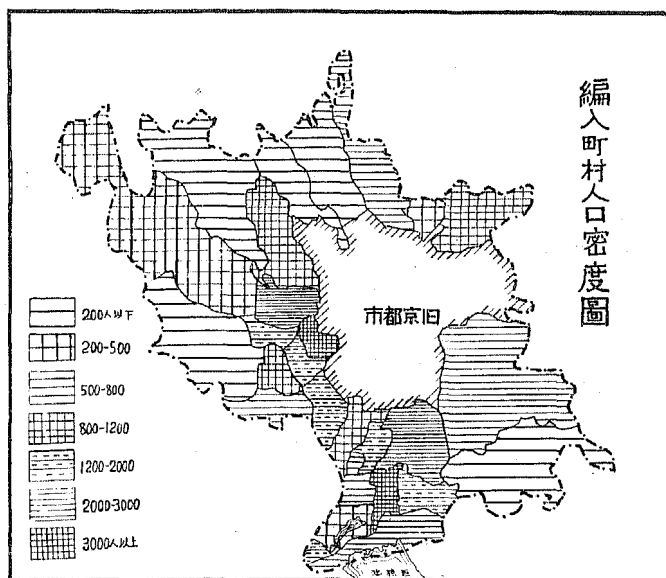
人口問題

人口問題が今回編入問題の根幹をなすものである以上當然編入町村の人口異動状態が問題と

## 第二圖

なるわけである。今前表を通覧するに伏見市は僅々二・八四方軒の所に三萬一千餘人あり、其密度は驚くべし一方軒一萬を超へ編入地域最大

編入町村人口密度圖



大京都市實現

の密度である。

此に反し北方山地を占むる諸村は非常な寡少で就中梅ヶ畑村の如きは僅かに一方軒密度六十八人に過ぎない地域もある。一般に市に接續する地域は實數・密度とも大なる事は勿論であるが、就中人口一萬以上を超ゆるものは太秦、西院、花園、深草、山科・伏見にして此六ヶ市町村で全人口の六十パーセントを超えてゐる。従つて殘餘の廿一ヶ村の人口合計を以つてしても全體の四十パーセントに過ぎない。此處に於て大部分の町村は人口實數の少ない田園的村落に過ぎない事が窺はれる。(第二圖人口密度圖參照) 東京市接續近郊町村の人口總計が東京市の人口に殆んど等しい状態にあるものとは大いに意義を異にしてゐる。但し東京市が今日かくの如く膨大した接續町村を編入するにつき一大困難に遭遇してゐるらしいから徒に人口膨大せぬうち編入し住宅區域工業地區等を設定し統合的各種都市的理想施設を施さんとする遠大の計畫により編入せられたものと聞いてゐる。

全體としてはかく人口問題の上より見て今急に編入をせねばならぬと思はれる點はないが市街接續地の町村は近々十年間に於て驚くべき急速な發展を來してゐる。今左に各市町村の人口増加率を表示し其趨勢状態を見るに過去十ヶ年乃至五ヶ年間に於ける増加状態が同一でなく、二者の間に著しい差がある。例へば深草町の如きは最近五ヶ年間の増加率は僅か二十五%であるが、十ヶ年間の増加率は四百二十%の増加率である。此は初から五ヶ年間に驚くべき増加で最早市街地化し最近の五ヶ年間に於ては著しく其率が低下した事が窺はれる。接續町村以外の周縁部の町村になると其増加率が殆んど一率的状态にある。此等周縁部の田園町村は何等人口問題上直接舊京都市の影響を蒙つてゐない普通の町村である事が知られる。

編入町村の人口増加率

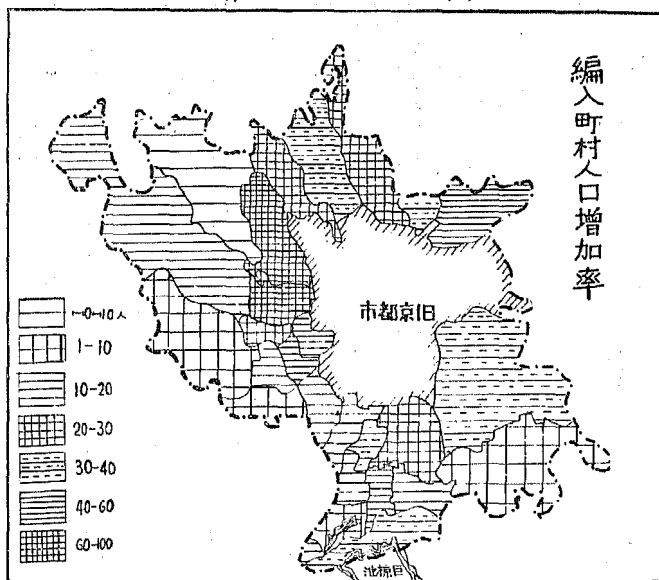
| 市町村名 | 自大正十四年<br>至昭和五年 | 五ヶ年間<br>増加率 | 自大正九年<br>至昭和五年 | 十ヶ年間<br>増加率 |
|------|-----------------|-------------|----------------|-------------|
| 伏見市  |                 | 三・三%        |                | 一・二%        |

|      |       |        |
|------|-------|--------|
| 修學院村 | 五二・八% | 一五一・二% |
| 松ヶ崎村 | 三四・五% | 六〇・二%  |
| 上賀茂村 | 二一・七% | 五四・二%  |
| 大宮村  | 三一・〇% | 四八・八%  |
| 鷹ヶ峰村 | 二一・八% | 四四・八%  |
| 太秦村  | 九七・三% | 二一八・六% |
| 西院村  | 八一・四% | 三二五・二% |
| 京極村  | 四七・六% | 五九・〇%  |
| 桂村   | 一九・八% | 二二・四%  |
| 川岡村  | 八・七%  | 二一・八%  |
| 松尾村  | 七・六%  | 一八・六%  |
| 梅津村  | 二一・九% | 三八・四%  |
| 嵯峨村  | 一九・七% | 四五・一%  |
| 花園村  | 六九・〇% | 一六一・一% |
| 梅ヶ畑村 | 減四・〇% | 減四・一%  |
| 向島村  | 三四・四% | 七八・四%  |
| 堀内村  | 一四・一% | 六二・八%  |
| 深草町  | 二五・七% | 四二〇・六% |
| 竹田村  | 三一・五% | 七三・三%  |
| 吉祥院村 | 一四・五% | 九一・八%  |
| 上島羽村 | 一八・八% | 三五・六%  |
| 下島羽村 | 一七・二% | 二七・五%  |

|      |       |        |
|------|-------|--------|
| 横大路村 | 四・五%  | 一・五%   |
| 納所村  | 一五・〇% | 二七・九%  |
| 山科町  | 三六・三% | 一〇二・〇% |
| 醍醐村  | 五・〇%  | 五・二%   |
| 合計   | 二七・八% | 六〇・〇%  |
| 舊京都市 | 一二・五% | 二九・三%  |
| 新京都市 | 一五・二% | 三四・四%  |

右のうち最も人口増加率の大なるものは過去十ヶ年間に於ては深草町にして四二〇パーセントの増加である。即ち深草は十ヶ年間に四倍強の増加で如何に急速なる膨張であるかが判る。次は西院(三二五%)太秦(二一八%)花園(一六一%)修學院(一五一%)山科(一〇二%)の順にして等しく變態的膨張で市内に收容し能はざる向が此隣接地町村へ押寄せたものに他ならぬ。此等高率を示す地域は多くは住宅地か又は工業地となつてゐるものにして舊市と接續し交通至便何等舊市内と異なる點がないまで市街化した地域である。故に此等地域の編入は寧ろ遅き位であるが、西方及北方又は東南部の山地を占むる

第三圖



周縁部の町村は此方面より眺めても都市に編入する必要を認める様な人口上の問題はないやうである。

又六大都市の五ヶ年間に於ける平均人口増加率について見るに左の表に示す通り横濱が最大にして、次は名古屋、大阪の順にして、京都、神戸は遙かに下り東京に到つては驚くべき不成績を示して居る。此等の一々についての事情は明かにする材料を有せないが察するに東京市がかくの如き不成績を示した所以は市内は最早人口飽和状態に達し、これ以上増加の餘地がないからで（従つて郊外接續町村へ溢れ出で接續町村の人口益々増加する）あらう。横濱が第一位を示す理由は大震災の復舊に伴ふ入込みが最大の原因かと考へられる。名古屋、大阪は共に編入も近年行はれ猶ほ人口包含力あり且つ入込、自然共に増加大であるからかく好結果を示したものであらう。我舊京都に至つては、此等の諸市に比し劣るのみならず今般編入地域の過去五ヶ年間の平均増加率を加へても尙劣る。依つてこの方面より眺めても同じく人口増加に伴ふ理由から廣大なる地域編入の必要は火急を要する問題とは考へられない。

### 六大都市の人口増加率

都市名  
自大正十四年  
至昭和五年  
間増加  
上記五ヶ年間毎年  
平均人口増加率

| 都市名                  | 人口       | 割合  | 平均人口増加率   |
|----------------------|----------|-----|-----------|
| 大阪                   | 三三八、七六五  | 一六〇 | 〇・〇三〇六三六七 |
| 東京                   | 七四、九六二   | 三八  | 〇・〇〇七四二五五 |
| 名古屋                  | 一三、八四四   | 一八一 | 〇・〇三三七七一七 |
| 神戸                   | 八三、二二一   | 一一八 | 〇・〇二二五八六一 |
| 京都                   | 八五、一七九   | 一二五 | 〇・〇二三八八五四 |
| 横濱                   | △一二五、九四一 | 一   | 〇・〇二八七七三三 |
| （京都△印は新編入地域を含む人口増加率） | 一〇五、二一九  | 二〇四 | 〇・〇三七八七五八 |

然らば編入の理由は何か。勿論理由は人口問題のみでなく多種多様であるが就中既に述べた通り、本市在來の特徴たる遊覽的都市としての眞價を遺憾なく發揮さすために近郊に散在する幾多の名勝、遊覽地等を一括した都市たらしむる點及び統合的都市完成、都市計畫に基く住宅地區、工業地區の設定等が其重なる理由の如く解せられる。無論かくの如き編入問題等は一面政治問題で理論上又實際上の問題を超越して行はれる場合があるので其理由を一々地理學上見



出す事は困難であり、且つ又それは本編の趣旨とする所でないが、只事實を地理上より見て論述したに過ぎない。尤も最初の編入計畫は西南周縁部の七ヶ村を除いたものであつたが、後此七ヶ村をも加へられたものである。

### 行政區劃

編入後の行政區劃は京都府告示第二百二十號を以て布告せられた。同告示全文を示すと左の通りである。

京都府告示第二百二十號 伏見市外二十六ヶ町村を廢し其區域を京都市に編入せらるるに付これに伴ふ京都市の區の設置及び境界變更左の通定め昭和六年四月一日よりこれを施行す

昭和六年三月二十三日 京都府知事

上京區—上京區の境界を變更し愛宕郡上賀茂村、大宮村、鷹

ヶ峰村の地域を編入す

左京區—左京區の境界を變更し愛宕郡修學院村、松ヶ崎村の地域を編入す

東山區—東山區の境界を變更し宇治郡山科町の地を編入す

下京區—下京區の境界を變更し紀伊郡吉祥院村、上鳥羽村の地を編入す

右京區—葛野郡花園村、西院村、太秦村、梅ヶ畑村、蟻峨町、梅津村、京極村、松尾村、桂村、川岡村の地域を以

大京都市實現

つて新に右京區を置く  
伏見區—伏見市、紀伊郡竹田村、深草町、堀内村、下鳥羽村、横大路村、納所村、向島村、宇治郡醍醐村の地域をもつて新に伏見區を置く

とあり新行政區域は明瞭である。此他編入地域に關係ない舊來の中京區があるから、つまり全城を七區に分けてある。而して各區の面積、人口を表示すれば左表の通りになる。

| 區名  | 面積       | 人口       |
|-----|----------|----------|
| 上京區 | 四五・九一三方軒 | 二一九、九五〇人 |
| 中京區 | 七・二三三    | 一六三、八九〇  |
| 下京區 | 一八・九七一   | 二一二、四〇三  |
| 左京區 | 三一・六七八   | 一〇七、一一七  |
| 東山區 | 三五・七九八   | 一一一、五七六  |
| 右京區 | 九九・二八〇   | 五九、二六六   |
| 伏見區 | 五〇・七七一   | 七九、一九五   |
| 合計  | 二八八・六四六  | 九五二、三九七  |
| 舊市  | 六〇・四二九   | 七六五、一四二  |

右表で明かなるが如く面積最も大なる區は右京區にして舊市の約一倍半に及ぶ廣大なる地域であるが人口は僅々六萬に達せず、一面の田園と猪や猿が棲む奥山が其大部分を占めてゐる。

昔は京に田舎ありといふ言葉で田園が都人士にめづらしがられてゐたが現在では田舎に京ありといふ顛倒した状態となつた。

因に新區の區役所は右京區は太秦に、又伏見區は伏見に設置せられた。

## 産 業

編入市町村の産業は大體農(林)工、商の三業に限定せられてゐる。

## 一、農 業

編入地域の大部分が山林と耕地とからなる農村地であるから農を以て古來生活の根柢として來た。然るに近時舊京都市工業の急速な發展に伴ひ接續町村は工業地帯と化し、純農家の割合は商工家の増加に反して年一年と減少し其生産高も工産物に凌駕され工業生産額の約十分の一に過ぎない。然し近郊は肥沃なる山城平野の一部分に當り耕地總面積は五千四百町歩に達し、(全地域の二十三パーセント)米八萬七千石餘、麥二萬五千石餘を主とし其他蔬菜、果樹等の栽培地として最も集約的農耕の進歩せる地域である。

る又山地と平地との間の洪積層の丘陵地は茶と筍の重要分布區をなし、宇治茶、山城筍の產地である。京都は其位置海に遠く交通不便な時代は海産鮮魚の供給自由でなかつた關係上海産珍品に代るに蔬菜料理を以つてしたから蔬菜栽培の技は特に優れてゐた。彼の聖護院大根等は此の代表的なもので元は聖護院附近は其主栽培地であつたが栽培地は漸次住宅地となつた關係上今日に於ては舊市の周縁部にと移動し洛北修學院方面が其產地となつてゐる。又千枚漬の原料となる玄琢蕪は大宮村附近を中心に、すぐきは上賀茂方面を主產地として栽培され共に京名物の代表的なものである。其他山科茄子、桂瓜、山科のメロン、葡萄等獨特の名があるものが多いが其生産額は比較的僅少である。近郊の農村は米麥の主要作物よりは寧ろ蔬菜栽培が利潤多い關係上殆んど蔬菜園たらざるはなく舊京都市需要の大部分を満して來た。

編入地域の重要農産物生産高は次の通りである。

## 重要農產物(單位千圓)

| 編入地<br>郡別 | 米   | 麥   | 茶  | 園藝作物 | 牛乳  | 鷄及卵 |
|-----------|-----|-----|----|------|-----|-----|
| 愛宕        | 三三六 | 三三  |    | 二七四  | 六   | 一〇〇 |
| 葛野        | 九〇  | 一八二 |    | 五四五  | 一七三 |     |
| 紀伊        | 九四七 | 五〇  | 八三 | 一四〇  | 二五  | 三七七 |
| 宇治        | 四八一 | 元   | 八  | 二六   | 四七  |     |
| 計         | 二五六 | 二八  | 一六 | 一、一九 | 四三  | 三四  |

工業

編入市町村中には舊京都市の影響を受け古來若干の工業があつたが小規模な家庭工業にして産額言ふに足らざるものであつた。只伏見の醸造業は其起原古く且つ産額亦四近に比ないものであつた。近年機械工業が勃興し各地に大小の工場簇立し、其生産額は左表に示す通り編入地域全生産額の八十八パーセントを占むるに至つた。

## 重要工產物(單位萬圓)京都府統計書

大京都市實現

|   |    |      |    |    |            |
|---|----|------|----|----|------------|
| 計 | 宇治 | 紀伊   | 葛野 | 愛宕 | 編入地<br>域郡別 |
|   | 三  | 1111 |    | 二五 | 燃金<br>絲製品  |
|   |    | 1111 |    |    | 清酒         |
|   | 五  | 1110 | 壹  | 三  | 染色         |
|   |    |      |    | 三三 | 洋紙         |
|   |    | 九    | 六  |    | 木製<br>品製石  |
|   | 六四 | 100  | 六  | 六八 | 土主<br>織物   |
|   |    | 1111 |    |    | 罐電<br>具瓦斯  |
|   |    | 1111 |    |    | 味淋<br>耐品   |
|   |    | 1111 |    |    | 藥油         |

右表に明かなる如く舊紀伊郡最も多く舊葛野郡に屬する地方が最も少く二者の間に格段の相違を見る。舊紀伊郡下の工産額の大部分は伏見より産出せられ、伏見は各種工業の中心地にして、清酒（一三六四萬圓）味淋（一九〇萬圓）焼酎（二一二萬圓）木製品（九九萬圓）電氣瓦斯器具（九五萬圓）金屬製品（九五萬圓）植物油（一五萬圓）水産製造物（三〇萬圓）藥品（一六萬圓）織物（十萬圓）酒樽（四五萬圓）醬油（二〇萬圓）染物（九〇萬圓）製絲（三〇萬圓）等を主として合計年額二千三百六十萬圓に達し編入地全城の全生産額の約五十パーセントに近し。

次は葛野郡太秦、花園を中心とする映畫製作事業にして阪妻、日活、帝キネ、千恵藏（以上太秦）マキノ（花園）等の諸撮影所檐を並べ此等従業員は數千人に及び、年産額一千數百萬圓に達し我國第一の映畫街を作り眞に東洋のハリウッドの名に背かない。

尚西方西院、太秦、梅津、京極の諸村に涉る一帯は舊市西ノ京、壬生方面と連續する一大工業地區をなし製絲（日本クロス）晒木綿、友禪等の諸工業盛んである。

其他東方山科方面も近時各種工業發展し鐘紡を始め大小工場百五十餘に及び其産額七百數十

萬圓の多きに達し京都工業地帯の一飛地の觀がある。  
最後に編入地域全體に於ける生産總額を示すと左の通りである。

生産總額（單位萬圓）

| 編入地別 | 總額   | 農産  | 畜産  | 林産 | 鑛産 | 水産 | 工業    |
|------|------|-----|-----|----|----|----|-------|
| 愛宕   | 一三六  | 五四  | 八   | 五  | —  | —  | 五六    |
| 葛野   | 五二   | 二四  | 三七  | 二四 | 三  | —  | 三五〇   |
| 紀伊   | 三、六三 | 二七  | 四四  | 一六 | 二二 | —  | 三四五三  |
| 宇治   | 八六六  | 七四  | 九   | 元  | —  | —  | 七五三   |
| 計    | 五、四七 | 四一〇 | 一〇八 | 七三 | 一五 | 五  | 四、六一二 |

（未完）

## 簸川平野の民家

岡義重

斐伊川三角洲地方を主として調査した農家住宅の一斑であつて、名稱には特に方言を訛音の

儘附記して置く。

（一）屋根